法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

平敷屋朝敏作「手水の縁」

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
11
(開始ページ / Start Page)
67
(終了ページ / End Page)
67
(発行年 / Year)
1965-03-23
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019104

語」や「苔之下」などの暗い作品とは大いに相異する。作者、晩年の頃の和文による作。

註5　組舞は、沖縄の古典劇で、能と歌舞伎とを折衷したような形式をもつ楽劇。句詞、地謡ともに、八六調を基調とする韻文で「間の物」（能の狂言にあたる）、「道行き」、「踊り」「立ち回り」などが組合わされてある。日本本土の能の影響が見られる。

註6　大屋子は按司（領主）、に仕える重職の武士である。

註7　尚敬王の一七三〇年代に王府に踊奉行として仕えた組舞の作家。「執心鐘入」「銘苅子」などの外にも多数の作品がある。彼の作品は、儒教思想が濃厚である。

註8　琉歌のなかに、義理という表現をもって正面から諷刺した作品が多い。

註9　高宮城親雲上も、尚敬王の頃の人で、儒教的思想による組舞を書いた作家。

平敷屋朝敏作

組舞　手水の縁

・

此時、雨笠かぶり杖持出候也

人物

山戸
玉津
志喜屋の大屋子
山口の西掟
門番

山戸　（音楽）（いちんたうぶし）[1]

春や野も山も　　春は野も山も
百合の花ざかり、　　百合の花ざかりだ
行きすゆる袖の　　行きすぎる人の袖の
匂のしほらしや。　　匂のゆかしさよ

山戸

我身や島尻の　　私は島尻の
波平大主の　　波平大主の
なし子山戸よ。　　子供の山戸よ
けふや上下も遊ぶ　　今日は上下の人も遊ぶ
三月の三日[2]　　三月の三日
うそ風もすだしや、　　和やかな風も涼しい
瀬長山登て　　瀬長山に登り
花ながめすらに、　　花見をしよう
花とやり遊ば。（間）　　花をとって遊ぼう
世間とよまれる　　世間で有名な
瀬長山見れば、　　瀬長山を見ると
花や咲き美さ　　咲く花は美しく
匂しほらしや。　　匂もゆかしい
こまに足よどで、　　此所にとどまって
花ながめすらに。　　花を眺めよう